

# 小説

## 仮名草子

仮名草子とは、近世初期に主に仮名を用いて書かれた読み物で、啓蒙・教訓・娯楽などを目的として作られ、出版された。小説

の歴史の上では、中世の御伽草子(▽p.87)のあとをうけ、本格的な近世小説である浮世草子(▽次ページ)が登場するまでの橋渡しの役割を果たしており、さまざまな要素のまじった過渡的な性格をもっている。

● **主な作品** 代表的な作品としては、教訓性のあらわな『二人比丘尼』(鈴木正三)や『清水物語』(朝山意林庵)、随筆のスタイルで世相を批判した『可笑記』(如儡子)、インソップ物語の翻訳である『伊曾保物語』、著名な古典『伊勢物語』をパロディ化した『仁勢物語』、御伽草子風の恋物語『うらみのすけ』、笑話集『醒睡笑』(安楽庵策伝、▽p.130)、戯医者竹齋の滑稽な東海道の旅行記『竹齋』(富山道治)、浮世屋という滑稽な人物の一代記の形式で当時の世相を描く『浮世物語』(浅井了意)などがある。

『浮世物語』世に住めば、なにはにつけて(≡何かニツケテ)善し悪しを見聞かす事、みな面白く、一寸さきは聞なり。なんの糸瓜の皮(≡何事モ意ニ介サズ)、思ひ置きは腹の病、当座当座にやらして、月・雪・花・紅葉にうちむかひ、歌をうたひ、酒のみ、浮きに浮いてなくさき、手前のすり切り(≡家計ノ状態)も苦にならず、沈み入らぬ(≡深く思イコマナイ)心だての、水に流るる飄々のごとくなる、これを浮世と名づくるなり。

● **作者** これらの作品の作者には、古典的教養が豊かであった公家を初めとし

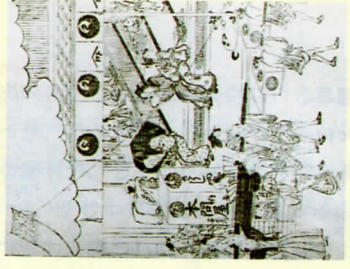
て、仮名草子を民衆教化の手段として利用した僧侶や儒者、大名に仕えて話題提供を役目としたお伽衆、関ヶ原の戦いなどで禄を失った浪人、それに新興の文学である俳諧を職業とした俳諧師などがいた。中でも、作品の質・量両面において、仮名草子作者中の第一人者と目されるのは浅井了意で、『浮世物語』以外にも、怪異小説集としての『伽婢子』や、東海道の名所案内である『東海道名所記』など、後世にも大きな影響を及ぼした多くの作品を残した。

中世には、仏教的な無常観(▽p.81)や厭世思想の影響によって、現世を辛い世の中とみる「憂世」という言葉があった。しかし、近世になって人々が太平の世を謳歌しはじめると、現世は「憂世」であるよりは、むしろ「浮世」と表現されるような享楽すべき世の中として認識されはじめた。浮世草子とは、そうした当代の享楽生活や好色風俗などを積極的に取り上げる写実的な風俗小説として登場したものであった。

中世的なものを完全にはぬぐい去れなかつた過渡的な仮名草子のあとをうけて、真に近世的な小説がここに初めて成立したことになる。その最初の作品とされるのが、天和二年(一六六二)刊の井原西鶴作『好色一代男』で、以後、大坂と京都を中心に天明年間ごろまで百年近くの間、浮世草子は出版され続けた。

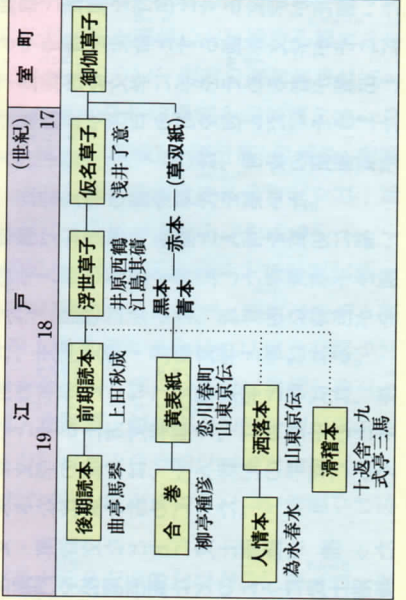
大坂の富裕な町人であつたといわれる西鶴は、はじめ西山宗因(▽p.118)門下の俳諧師として活躍し、阿蘭陀流の異名を得た奔放な俳風をもつて鳴らした。師の宗因没後、初めて小説に手をそめ、転合書として発表したのが『好色一代男』である。

● **好色物** 『好色一代男』は、世之介という主人公の一代の好色生活を、五十



本店の店先 (江戸名所図会)

### 近世小説の流れ



- ▶ 『清水物語』 寛永十五年(一六三八)刊。作者の朝山意林庵は儒者、儒教の立場から仏教を批判した本書は、大きな反響を呼んだ。仏教側からの反駁の書に『福園物語』がある。
- ▶ 『可笑記』 寛永十九年(一六四二)刊。作者の如儡子は、奥州二本松藩にゆかりのある浪人斎藤意伝。五巻二百八十段からなるが、全編に根柢概調の世相批判があふれている。のちにこの作に共感した浅井了意は、『可笑記評判』という解説書を出版したほど、よく読まれた。
- ▶ 『浅井了意』 慶長十七年(一六四二)元禄四年(一六五九)刊。仮名草子作者。経歴はよくわからないが、水い間浪人生活をし、のちに出家して京都の本性寺という寺に住んだ。五十年ほどの作者生活の間に、さまざまな分野の仮名草子を著作した。
- ▶ 『伽婢子』 寛文六年(一六六六)刊。中国の明の時代の伝奇小説集『新燈新話』中の話などを原話とし、これを日本的な話に改作した翻案もので、六十八の怪談を取める。後世の怪異小説・怪談に大きな影響を及ぼした。

### 語注

\* 転合書 ≡ 『好色一代男』のあとがきに「見ゆる言葉。ふさけて書いたもの、遊び半分」に書いたものの意味で、『好色一代男』が遊戯性や諷刺性に満ちた作品であることを述べたもの。



四章にわたって描いた長編小説で、『源氏物語』や『伊勢物語』などの古典をパロディ化しながら、当時の好色風俗を鋭い観察に基づいて大胆かつ清新に描いて、好評を博した。題材からこれは好色物と呼ばれるが、西鶴の好色物としては他に、実在の恋愛事件に取材した五つの短編集『好色五人女』や、一人の女の好色生活と転落の跡を描く『好色一代女』などがある。



井原西鶴(一品筆)

【町人物】また、西鶴は町人の経済生活にも強い関心を寄せて、町人物を発表した。どうすれば分限者(金持)になれるかを扱ったモデル小説『日本永代蔵』や、一年の最終日である大晦日に悪戦苦闘する中、下層の町人の悲喜劇をリアルな目で見つめた『世間胸算用』などである。

【武家物・雑話物】そのほかに、武家社会に材料を求めた『武道伝来記』や『武家義理物語』という武家物、諸国の珍談・奇談を集めた『西鶴諸国ばなし』や『懐硯』という雑話物などが、続々と出版された。

没後の遺稿として出版された作品の中にも、放蕩の果てに零落していく町人の姿を淡々と描いた『西鶴置土産』や、用済みの手紙を通して人間の心の真実を見るという趣向をもつ書簡体小説『万の文反古』などの傑作がある。

【表現・文体】口語文脈を基本にしなが、その中に『源氏物語』『伊勢物語』などの古典や謡曲の表現を積極的にとりこみ、俗語と雅語のいりまじった二種独特の詩的散文となっているのが『好色一代男』の文章である。文体の特徴と

しては、主語や述語の省略、あるいは連体止めの多用などがあげられる。これらは俳諧の連句的な連想に基づくものといわれ、難解な面もあるが、次々と飛躍し展開していく自由はつらつとした文体は、人間性の解放をうたい上げる内容と照応して、みごとな効果を収めている。

『好色一代男』巻一・冒頭

桜も散るに嘆き、月は限りありて入佐山、ここに但馬の国かねほる里の辺に、浮世の事を外になして、色遣ふたつに寝ても覚めても夢介と替名よばれて、名古屋三左、加賀の八など、七つ紋の蓑にくみして身は酒にひたし、一条通り、夜更けて戻り橋、ある時は若衆出立、姿をかへて墨染の長袖、又は立髪かづら、化物が通るとは誠にこれぞかし。

【口語訳】桜もすぐに散ってしまうので人は嘆き、月は限りがあつて山の端に入つてしまふ。そんな入佐山のある但馬の国の銀山近くに住んで、世俗のことはほつたらかし、男色・女色の二つの色遣に夢中になつて、夢介とあだ名を呼ばれ、人に知られた名古屋三左や加賀の八などという遊び人と蓑の七つ紋を印として仲間づき合い、酒びたりの毎日、(京の遊廓から)一条通りを通り、夜更けに戻り橋を帰っていくその姿は、ある時は若衆の坊長、また姿を変えて僧衣をまとつたり、または立髪鬘の男伊達となつたり、まったく化物が通るとはこのことだ。

●西鶴以後——八文字屋本 西鶴の没後は、しばらくの間、西鶴を模倣した作品が続いた。そうした中で、西鶴の影響を受けつつも新味を見せた作者に江島其積がある。其積は版元の八文字屋との争いをきっかけに、浮世草子に新しい領域を開拓した。その一つが演劇に材料を求めた時代物であり、一つが人間の性癖を誇張して取り上げ、その中に滑稽味を見いだそうとした『世間子息気質』(正徳五年)『浮世親仁形気』などの気質物の作品である。

これらの作品は八文字屋本と呼ばれ、長く通俗的な娯楽小説として栄えたが、西鶴のような人間観察の鋭さやリアルな表現力はなく、しだいにマンネリ化し

▶井原西鶴 寛永十九年(二四)〜元禄六年(六六)。大坂の富裕な町人の出身で、俗称を平山藤五といつたらしい。大坂の隠林派の俳諧師として名を成し、特に限られた時間内にいかに多くの句を詠むかを競う矢数俳諧(ひかず)を得意とした。四十一歳の時に『好色一代男』を出版して以来、没するまでの十年余りの間に、数多くの浮世草子を著したが、中には必ずしも西鶴みずからの執筆ではなく、編集者として他人の原稿を自作の中に編入したものもあるといわれる。辞世の句「浮世の月見過ごしにけり未二年」。

▶西鶴の浮世草子——主要作品年表——

天和二(二六)	41	歳	好色一代男
貞享元(六六)	43		諸国大鑑(好色一代男)
二(六六)	44		西鶴諸国ばなし
三(六六)	45		好色五人女、好色一代女
四(六六)	46		武道伝来記、樹石
元禄元(六六)	47		日本永代蔵、武家義理物語
五(六六)	51		世間胸算用
六(六六)	52	(没)	西鶴置土産
九(六六)			万の文反古



『好色五人女』八 百屋お七の役者絵



越後屋(奥村政信筆)『日本永代蔵』巻一に登場する。

▶江島其積 寛文六年(六六)〜享保二十年(七五)。本名を片瀬権之丞。京都名物大化師屋の主人であったが、演劇通で余技として役者評判記などを書いてきた。その縁で、京都の本屋八文字屋から浮世草子を出版することになったが、著作権をめぐって八文字屋と対立した。時代物や気質物を書く以前には、西鶴の影響を受けながらも新機軸を出した『傾城色三味線』や『傾城無知気』などの好色物を書き、好評を得て八文字屋本の名を定着させた。

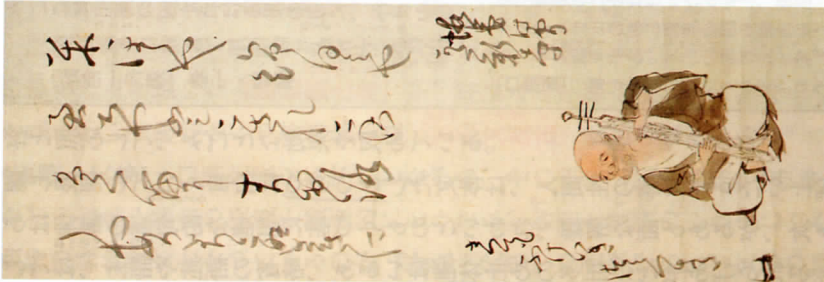


ていった。ただし、その末期に、のちの読本作者上田秋成や和訳太郎のペンネームで、『諸道聴耳世間猿』『世間妄形氣』という作品を書いて、皮肉な観察と才気を見せているのが注目される。

読本

絵を見る絵本や、浄瑠璃などの語りものの本に対して、文を読むのをも主とした本が、読本という本来の意味であるが、文学史の上では、マンネリ化した八文字屋本に交替するように十八世紀の半ばごろに上方に登場し、のちに中心を江戸に移して出版された一群の小説をいう。上方中心の時期を前期読本、江戸中心の時期を後期読本(江戸読本とも)という。

●前期読本 読本を始めたといわれるのは都賀庭鐘で、当時、儒者や医者など知識人の間で流行していた中国の白話小説に影響されて、『英草紙』や『繁野話』など漢語を多用した力強い文体をもつ短編の奇談小説集を発表した。また国学者の手になる読本もあらわれ、建部綾足は和文体の『西山物語』や『本朝水滸伝』を著した。そして、賀茂真淵門下の国学者でもあり、庭鐘の医学の門人でもあったという上田秋成の登場によって、前期読本が完成されたのである。



無錫居士(上田秋成)肖像 賛・像とも秋成自筆。

上田秋成

大坂の商家の養子として育ち、のちに町医者に転業した秋成は、明和五年(二六六)に前期読本の代表作『雨月物語』を著し、推蔵を重ねて八年後に出版した。九編の怪異小説からなる短編集で、執念に凝集した人間性の真実を、怪異の出現を通してみごとに描き出している。晩年の作品に秋成の特異な歴史観の託された、十編の短編からなる『春雨物語』がある。

【表記・文体】和漢の古典を利用し、緊密に練り上げられた文章である。和漢混交文を基本とする、力強くも物さびた趣をもつその文体は、『雨月物語』のテーマである怪異の出現を効果的に準備する役割を果たしている。



「雨月物語」浅茅が宿挿絵

「雨月物語」浅茅が宿  
壁には烏鶯延ひかり、庭は律にうづもれて、秋ならねども野なる宿なりけり。さてしも臥したる妻はいつち行きけん見えず。狐などのしわざにやと思へば、かく荒れ果てぬれど故住みし家にたがはで、……(中略)……  
熱いおもふに、妻は既に死りにて、今は狐狸の住みかはりて、かく野なる宿となりたれば、怪しき鬼の化してありし形を見せつるにてぞあるべき。

【口語訳】壁にはつる草がはい上がり、庭は雑草が一面に生え茂って、また季節は秋ではないが、秋の野原のような宿のありさまである。それにしても、そばに寝ていた妻はどこへ行ったのか、姿も見えない。狐にでも化かされたのかと思うが、このように荒れ果ててはいるが以前自分が住んだ家に相違なく、……(中略)……よく考えてみれば、妻はすでに死んでおり、この家も今は狐や狸が移り住んだため、こんな荒れた家となったので、きっと物の怪が化けて、妻のありし日の姿を自分に見せたのであろう。

▼**気取物** ある特定の身分・職業・年齢の人物に共通して見られる類型的な性格や癖などを誇張しパターン化して描くことを方法とした作品をいう。式亭三馬の『勘十郎気取』や明治になって坪内逍遙の『当世書生気取』など、以後の書名にもその名残が見られる。

▼**新撰読本** 享保三年(二三〇)寛政六年(七四〇)ごろ。大坂の儒者・医者。近路行者という号で読本を書いた。中国語に通じ、謡曲や浄瑠璃を中国語訳したり、中国の大字典『康熙字典』を校定して日本で出版したりした。

▼**白話小説** 中国の口語・会話文を白話といひ、白話による小説を白話小説という。長編に『忠義水滸伝』短編集に『今古奇観』などがあり、読本に大きな影響を与えた。

▼**「英草紙」** 寛延二年(二四〇)刊。正式には古今奇談英草紙。白話小説を翻案したものを中心に九つの短編を収める。「繁野話」はその後編。

▼**建部綾足** 享保四年(二三二)安永三年(二七四)弘前藩の家老の家に生まれたが出家し、源位と号して俳諧師となり、のちに片歌を提唱した。また寒葉齋という画号で漢画も描くなど、多才な人であった。

▼**西山物語** 明和五年(二六三)刊。京都郊外で実際に起こった事件に取材したもので、秋成も同じ事件を取りあげて小説化している。

▼**上田秋成** 享保十九年(二三三)文化六年(二六〇)青年時代には遊里にも出入りし、魚鳥と号して俳諧を詠んだが、後に国学を学び、本居宣長と論争したこともある。辛辣な皮肉屋でもあった。

▼**「雨月物語」** 安永五年(二五三)刊。白茅・菊の花の約・浅茅が宿・夢の虎の鯉魚・仏法僧・吉備津の釜・蛇性の経・首領巾・貧福論の九つの短編を収める。初編成立は明和五年(二六六)。

▼**「春雨物語」** 文化五年(二六三)ごろ成立。血かたびら・天津処女など十編から成る。秋成の生前には出版されなかった作品。

参考 『雨月物語』の魅力

高座の海軍工廠で私は疎開工場の穴掘り作業に使役されてゐた。恐るべき子供たちに私は雨月のわりやすい物語を話してきかせた。掘りかへされた生々しい赤土の上、わずかな樹影をおとす松の根方に陣取つて、私が砕いて話す雨月のいくつかの怪異譚が、この異邦の子供たちにどんな影響を与へたか知る由もない。私は話しかける人間がないので誰にともなく雨月を語りかけてゐたのに相違ない。それほど雨月は、当時の私のたぎざる独白、夢中のうは言のやうな親身なものになりかへつた。雨月の非情なまでの美の秩序は私にとつてのかけがへのない支へであつた。(三島由紀夫「雨月物語について」)

caricaturesco  
-estare o -pedes



● **後期読本** 十九世紀にかかるところから、読本出版の中心は上方から江戸へ移った。その後期読本の基礎を築いたのが**山東京伝**である。京伝は洒落本や黄表紙などでもすでに売れっ子作者であったが、寛政の改革の出版取締り以後、読本に進出し、『忠臣水滸伝』(寛政十二年)や『昔話稲妻表紙』(文化三年)を著した。

**曲亭馬琴**

京伝のあとを追いつつ、ついに京伝を追い越して後期読本の代表作者となったのが**曲亭馬琴**である。その馬琴が二十八年にわたり全精力を傾けて完成したのが、九十六巻百六冊から成る一大長編小説『**南総里見八犬伝**』である。八犬士の活躍する波乱万丈のストーリーは、幕末から明治にかけて多くの読者を魅了した。その他



『八犬伝 芳流園之図』(歌川国芳筆)

の作品では、『三七全伝南柯夢』と『樞説弓張月』が、『八犬伝』とともに三大奇書といわれ、馬琴の自信作であった。

● **作風** 馬琴の読本の特徴は、その雄大な緊密な構想を支えるために、**勸善懲惡**や**因果応報**という思想を駆使したところにある。また、作品を合理的に組み立てようとした馬琴は、中国の小説理論に導かれながら、**稗史七法則**と呼ばれる独自の小説理論を、『八犬伝』の創作過程の中から確立していった。

▶ **山東京伝** 宝暦十一年(一六)文化十三年(一六)刊。本名岩瀬醒。江戸深川の質屋に生まれた。浮世絵師としては北尾政道と称した。吉原通であらゆる戯作文学に手を染め、傑作を多く残した。洒落本『通言総鑑』、黄表紙『江戸生艶気権説』、読本『昔話稲妻表紙』などが代表作。

▶ **曲亭馬琴** 明和四年(一七)寛永元年(一六)刊。本名高沢解。旗本に仕える下級武士の家に生まれ、山東京伝のもとで戯作の修業をした。晩年失明したが、娘の協力で『八犬伝』を完成した。



曲亭馬琴(戯作者六家撰)

▶ **南総里見八犬伝** 文化十一年(一六)天保十三年(一八)刊。中国の長編小説『水滸伝』の構想に拠りながら、天明時代末期、仁・義・礼・智・信・忠・孝・節という儒教の徳目である八つ玉を持つ八犬士が、安房の国の里見家の家臣となって活躍するという話。

▶ **樞説弓張月** 文化四年(一七)文化七年(一八)刊。保元の乱に敗れた鎮西八郎為朝が、伊豆大島から九州・琉球へ渡って活躍する話。

『南総里見八犬伝』二輯 巻二  
主従は今さらに、姫の自殺を禁めあへず、われにもあらで蒼天を、うち仰ぎつつ目も黒白に、あれよあれよ、と見る程に、驟と音し来る山おろしの、風のまに八つの靈光は、八方に散り失せて、跡は東の山の端に、夕月のみぞさし昇る。当に是れ数年の後、八犬士出現して、遂に里見の家に集合ふ、萌芽をここにひらくべし。

〔口語訳〕(里見義徳)主従は今ほもう伏姫の自殺を止めることもできないまま、我を忘れて青空を仰ぎ、意外さに驚きながら、あれよあれよと見ているうちに、さつと音をたてて吹いてくる山おろしの風のまに、八つの靈光は八方に散り失せて、あとには東の山の端に、夕月がさし昇るばかりである。これこそ数年後に、八犬士が出現して、最後には里見家に集合するということ、そのまじしをここに開示したというべきであらう。

● **洒落本** 洒落本は、遊里を素材に、客と遊女との遊びのさまや、遊里風俗を穿つのを主眼とした文学である。宝暦年間(一七二一～一七三〇)ころに、漢字知識人の手になる漢文体の狂文として発生したが、のちに田舎老人多田翁の『遊子方言』によって、会話体の洗練された精緻な描写力をもつ洒落本の定型が確立され、山東京伝の『通言総鑑』『傾城買四十八手』などの傑作が生まれた。しかし、作品様式が行きづまりや、寛政の改革のさい京伝の洒落本が処罰されたこともあり、以後、衰えていった。



『傾城買四十八手』口絵 遊女、籠に乗る図。

- ▶ **勸善懲惡** 儒教の朱子学の思想で、善を勧め悪を感らしめることが文学の果たすべき役割であるという考え。因果応報は仏教の思想で、善い因を行えば富貴などの善い果を受け、悪い因を行えば貧乏などの悪い果を受けるといふ考え。
- ▶ **穿** 日常気づかいない物事の本質などを側面や裏面からとらえ、そこに隠された矛盾や欠点を暴露する意。「穿ち」はその名詞形。
- ▶ **遊子方言** 明和七年(一七)刊。遊客が江戸の遊里吉原に出かけ翌朝帰つていくまでを描く。
- ▶ **通言総鑑** 天明七年(一七)刊。実在の吉原の遊女屋松葉屋とその遊女をモデルとした作品。
- ▶ **傾城買四十八手** 寛政二年(一五)刊。客と遊女とのさまざまな関係を一場面ずつにまとめたオムニバス形式の作品。心理描写にすぐれる。

参考 通と粹  
世情(俗)に遊里の事柄に關ることを通といひその反対が野暮、通であることによつてもたらされる美意識を近世後期には粹といふた。粹は近世前期の上方では粹と呼ばれた。

語注 \* 寛政の改革 天明七年(一七)寛政五年(一五)にかけて老中松平定信によつて行われた。奢侈禁止などに努めた。\* 稗史七法則 『唐山元明の才子等が作れる雜史(小説)には、おのつから法則あり』として、主客体縁・照応・省筆などを挙げる。\* 狂文 江戸後期、滑稽と風刺を旨とし、雅語と俗語をまぜて書かれた文。





『春色梅見道』の養子丹次郎と、その許婚お長。

人情本

人情本は、後期読本から構成の方法を、洒落本から写実的な風俗描写や会話表現を取り入れて成立したとされる恋愛小説である。

舞台を遊里に限定せず、多く一人の男と数人の女性との間の恋愛関係を、情痴的な鬱屈気の中で描き、恋にあこがれる婦女子を主な読者とした。為永春水が代表的な作者で、『春色梅見道』や『春告鳥』などの作品がある。

天保の改革で春水が風俗を乱したとの理由で処罰され、その翌年に没したため、以後人情本も衰退したが、明治時代の硯友社の文学に、大きな影響を残した。

滑稽本

滑稽本とは笑いを目的とした小説であるが、宝暦年間に発生した談義本系統のものを前期滑稽本といい、享和二年(一八一一)に発

刊された『東海道中膝栗毛』以後を後期滑稽本という。

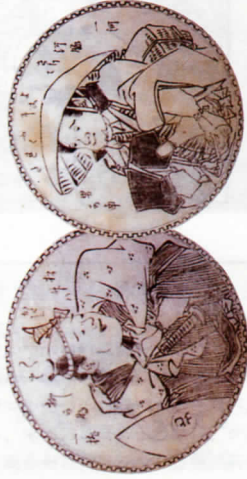
●前期滑稽本 滑稽に教訓性や風刺を伴った作品が多く、静観房好阿の『当世下手談義』(享和二年)が、その先駆けとなった。風来山人の『根南志真佐』や『風流志道軒伝』は、奇抜な構想を奔放な文体をもつ出色の作品で、痛烈な世相風刺を展開した。

●後期滑稽本 後期滑稽本は、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の出版をもって始まりとする。

『膝栗毛』は、東海道の旅をしながらさまざまな失敗と愚行を重ねていく弥次郎兵衛と北八(喜多八)の滑稽が、狂歌をまじえた会話体で描かれている。大好評をもって迎えられ、膝栗毛物として次々と続編が書かれていった。

一九に少し遅れて滑稽本を発表したのが式亭三馬で、『浮世風呂』や『浮世床』などの作がある。江戸庶民の社交場ともいえる銭湯や髪結床を舞台に、そこに入り出る老若男女の口癖などを紙上にリアルに再現し、太平の世の江戸庶民の姿を、笑いの中で生き生きと描き出した。

●表現・文体 三馬は、実際の庶民の日常会話をできるだけ忠実に表記しようと試みた。たとえば、次の例文中の「ぞ」は「ツァ」と発音することを区別し



弥次郎兵衛(右)と北八(左)

て示すために、わざわざ工夫して考え出した表記法である。こうした三馬の姿勢には、落語や浮世物真似などという当時の話芸の影響が大きいといわれる。

『浮世風呂』二編・巻之上 (八歳ばかりの女の子、門口の障子を明けて) 馬「おつかさん(トよぶ。風呂の内よりいできたり) 辰「なんだお馬か。何しに来た 馬「あのね、あのう、おとつさんがね、お客があるから、あのう、早うおあがりよ。そして、あのう、何処へも道よりをせすに、たつた今お帰りよ 辰「アイ、今帰ります。誰が来たのう。たまぐの湯へ来ても直にお迎ひだ。うるせへのう。そしておのし(「オヌシ。オマエ)はお手習に行たしやアねへか。何でお帰りだ 馬「けふはね、あのウ、お清書だから、清書双紙を取りに



式亭三馬(戯作者考補遺)

●為永春水 寛政二年(一七九〇)〜天保十四年(一八四三) 本名は佐々木貞高。越前屋長次郎と称して本屋を経営したり、為永登竜の名で講釈師をしたりしたこともある。式亭三馬の門人だが、人情本の創作にあたっては、助作者の筆になる部分が多いといわれ、春水単独作は多くない。

●春色梅見道 天保三年(一八三二)〜天保四年(一八三三)刊。色男丹次郎をめぐる、丹次郎の許嫁お長、丹次郎の情人の深川若菜米八、同じく深川若菜若吉の三人の女性の色横機が、お家騒動の枠組みの中で描かれる。

●語注 \*膝栗毛物『膝栗毛』は、膝を栗毛の馬の代用とする意で、徒歩で旅行すること。その旅行記をいう。\*天保の改革 天保年間の一八四一年から一八四三年にかけて老中水野忠邦を中心に行われた。この後、江戸幕府は崩壊への最後の過程をたどることになる。

●談義本 仏法を民衆に平易に説き聞かせる談義の手法を小説に応用したもので、滑稽の中に教訓を記した通俗小説。

●風来山人 享和二年(一八一一)〜安永八年(一七九七) 本名は平賀源内。田沼時代(一七六〇)に本草学者(博物学者)、蘭学者として活躍した。『根南志真佐』前編と『風流志道軒伝』は享和十一年(一八一一)刊。浄瑠璃の作もある多才の人であるが、殺傷事件を起こし、生死した。

●十返舎一九 天明和二年(一八一一)〜天保二年(一八三一) 本名は重田貞一。静岡の下級武士の家に生まれ、大坂で青年時代を過ごしたが、のちに江戸に出て戯作者となった。器用な多才作家で、黄表紙、洒落本の作も多い。

●東海道中膝栗毛 享和二年(一八一一)〜文政五年(一八二三)刊。東海道の旅が八編あり(東海道中膝栗毛)、そのあと続編が十二編あって、金毘羅参詣、宮崎参詣、木曾街道の旅などが舞台となっている。

●式亭三馬 安永五年(一七九七)〜文政五年(一八二三) 江戸生まれで、父は板木師であったという。早くから本屋に奉公し、戯作の道に入った。山東京伝に私淑し、黄表紙、台巻、洒落本などにも手を染めた。『浮世風呂』は、文化六年(一八〇五)〜文化十年(一八〇九)刊。『浮世床』は、文化九年(一八〇四)〜文化十二年(一八〇七)刊。ただし、『浮世床』の第三編は、三馬ではなく、彦亭駒又が執筆し、文政六年(一八二三)に出版された。



草双紙

延宝年間(二至三八)ころから登場した絵本を**草双紙**と呼ぶ。定期的に装訂や内容が変化し、**赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻**という順に変遷した。赤本には子供むきの『舌きれ雀』『猿蟹合戦』などの民話や童話が多い。黒本と青本は平行して出版され、内容上の差もないが、赤本よりは大人向きに創作味を加え、演劇の粗筋を紹介するような作品も多い。

●**黄表紙** 安永四年(一七五)の**恋川春町の「金々先生栄花夢」**以後を**黄表紙**という。画と文とが相補いつつ、当世の風俗を写真的に描いたこの作品によって、草双紙は真に大人のための絵本へと変身したのである。さらに作風は精緻な技巧をこらすようになり、**京伝の「江戸生艶気権焼」**や**芝全交の「大悲千縁本」**などが生まれた。しかし、寛政改革を素材にした**朋誠堂堂三三**の『文武二道万石通』などが干渉を受けてのち、穿ちによる滑稽という黄表紙本来の特徴が後退し、道徳的な学物や敵討物へと移っていった。



「金々先生栄花夢」

●**合巻** 敵討物の流行によって長編化したため、何冊かを合冊して出版する合巻が登場した。式亭三馬の『雷太郎強悪物語』が、黄表紙から合巻への橋渡しの作品とされる。代表作は**柳亭種彦の「修紫田舎源氏」**であるが、将軍家斉の大奥生活を取り扱ったとして、天保の改革において処罰された。以後、合巻はいよいよ長編化し、明治初期まで大衆向けの読み物として量産された。

▼**草双紙の出版形態** 中本と呼ばれる大きさで、表紙の色によって、それぞれ赤本・黒本・青本・黄表紙の名がつけられた。一冊五丁(十ペーシ)を基本とし、黄表紙は上・中・下三冊(十五丁)で出版されることが多かった。

▼**恋川春町** 延享元年(一四八)寛政元年(一七五)。本名倉橋格。駿河小島藩の武士。寛政改革を素材にした『観世逸文武二道』(寛政元年刊で幕府に召喚され、そのために自殺したともいう)。

▼**金々先生栄花夢** 田舎から江戸に向かう金村屋金兵衛が目黒の樂師屋で夢を見、栄華のはかなきを悟るという話。

▼**江戸生艶気権焼** 天明五年(一七五)刊。もてない金持ちのむすこ艶次郎が、何とかもてようと悪行をくり返す話。野暮や半可通を穿つ。

▼**芝全交** 寛延三年(一七五)寛政五年(一七五)。本名山本藤十郎。本職は大藏流狂言師。

▼**朋誠堂三三** 享保二十年(一七五)文化十年(一八一三)。本名を平沢常富。秋田藩の武士、手柄廻持の名で狂歌もよくした。

▼**柳亭種彦** 天明三年(一八一)天保十三年(一八三九)。本名を高屋彦四郎。江戸幕府の旗本。

▼**修紫田舎源氏** 文政十二年(一八二九)天保十三年(一八三九)刊。四十編。『源氏物語』を翻案したもので、時代を室町にとり、全体をお家騒動の形にまとめている。さし絵を浮世絵師歌川国貞が描き、その艶麗さも好評の一因であった。

俳諧

俳諧とは「俳諧の連歌」(ひりや)の略称であることからわかるように、中世にさかえた連歌から派生した。連歌の中でも、即興と機知をもとにした自由で民衆的な俳諧の連歌が、和歌的情趣をもとにした貴族的な連歌から独立したのである。「俳諧」という言葉は、もともと滑稽を意味するものであったように、室町時代末期の山崎宗鑑や荒木田守武などによる当初の俳諧は、奔放な滑稽をその生命としていた。そうした流れを受けて、近世俳諧の幕あけに位置し、以後の俳諧流行の地ならしをしたのが**松永貞徳**であった。



俳仙群会図(与謝蕪村筆)

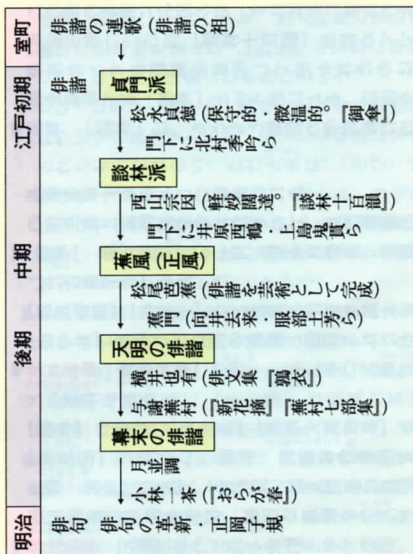
貞門

京都に住んだ貞徳は、はじめ連歌師で古典的教養も豊かだった。うえ、温厚な人柄も手伝って人望を集め、新興の文学である俳諧の指導者として、この様式の整備と確立につとめた。貞徳にひきいられた一門を**貞門**といい、野々口立圃・松江重頼・安原貞至・**北村季吟**などを擁して全国的な大きな勢力となった。貞門最初の俳諧集を『犬子集』といい、貞徳の俳諧式目書に『**御傘**』がある。貞徳は俳諧をわかりやすく解説して普及につとめ



芭蕉を祭る俳聖殿  
三重県上野公園内。

俳諧の流れ





たが、俳諧を和歌・連歌より一段下のものとする考えから抜け出せなかつたため、俳諧の詠みぶりは奔放というよりは**保守的・微温的**になりがちだった。

花よりも団子やありて帰雁 貞徳  
順礼の権ばかり行く夏野かな 重頼  
これはくとはかり花の吉野山 貞室

### 談林

京都を基盤にした貞門がしだいにマンネリ化し、あきらめられていったのにかわって、延宝初年(三三三)ごろに新しい勢力として大

坂に興ったのが、**西山宗因**を中心とする**談林派の俳諧**である。大坂町人たちの旺盛な経済力を背景にした、エネルギーにみちた**軽妙闊達な詠みぶり**を特徴とした。貞門が、連歌に見倣うことによつて、俳諧を文学として認知させようとしたのに対し、談林は「連歌にそむく所をもつて専ら俳体」としたというように、連歌の権威から徹底して自由であらうとした。



西山宗因

題材や用語、連句での付合(付句の付け方の面においても奔放・奇抜さが好まれ、宗因門下の西鶴や菅野谷高政などが活躍した。とくに**西鶴**は、限られた時間内に俳諧を数多く詠むのを競う**矢数俳諧**を得意とし、俳諧の遊戯化を促進した。しかし、談林の内部にも、放埒な遊戯化を快く思わない人々もあり、小西米山・池西言水・**上島鬼貫**などは詩としての純度の高い作品を残した。

されば爰に談林の木あり梅の花 宗因  
しれぬ世や釈迦の死跡にかねがある 西鶴  
白魚やさながらうごく水の色 米山  
床の果はありけり海の音 言水  
ぎやう水のすて所なき虫のこゑ 鬼貫

### 芭蕉



破笠筆芭蕉像

伊賀上野に生まれた**松尾芭蕉**は、藩主の一族である藤堂良忠(俳号を蟬吟)に仕え、主君ともども北村季吟の門人として**貞門**

の俳諧を学んだ。主君の没後、芭蕉は故郷を捨て、江戸に移り住んだ。江戸では**談林俳諧**の強い影響を受け、日本橋で俳諧宗匠として生活するようになったが、のちに繁華な市中での生活を嫌って、江戸の郊外深川に芭蕉庵をかまえ、風雅に沈潜する日々を過ごした。

●**蕉風** 芭蕉の俳風は**蕉風**と呼ばれ、門人の去来と凡兆の編集した**「猿蓑」**に最も

円熟した形であらわれている。**さびくしをりほそみ**などの言葉で説明されるように、**閑寂・高雅な句境**を表現しようとした。

しかし、芭蕉の俳風は生涯一定していたわけではなく、初期には談林調の遊戯的な句や、**「猿蓑」**に顕著な漢詩文調の破格な句を喜んだ時期もあり、また晩年には、**「辰俵」**に見られるような**「軽み」**の句を目ざした。

▼**松尾芭蕉** 元禄二年(二七)〜承応二年(三三)。細川幽斎に和歌を学び、細川に連歌を学んだ。当時一流の文化人で、その広い師友関係は自伝『談林恩記』に詳しい。晩年、俳諧に力を注ぎ、『御筆』のほか、『天水抄』『新加太氣波集』などの著作がある。

▼**北村季吟** 寛永元年(六四)〜享保二年(七五)。『山の井』を著して貞門の新鋭と注目されたが、『源氏物語』『枕草子』など古典の注釈を集大成した古典学者でもあった。

▼**徳草** 慶安四年(六六)刊。松水貞徳著。俳諧の作法書と歳時記を兼ねたもので、貞門俳諧の基準を示すものとして尊重された。

▼**談林** 「談林」は、もともと僧侶の学問修行の場を意味する「檀林」という語による。宗因を指導者とする新風を意味して使われたのは、延宝三年(七三)刊『談林十百韻』が初めてで、この書の巻頭に宗因の句「されば爰に談林の木あり梅の花」が置かれている。

▼**西山宗因** 慶長十年(六五)〜天和二年(六六)。肥後加藤家の臣であったが浪人して、大坂天神宮連歌所の宗匠となった。梅翁とも号した。

▼**菅野谷鶴** 号○七べーじ。

▼**矢数俳諧** 弓の競技に、京都三十三間堂などで通し矢の数を競う**大矢数**という催しがある。それをまねたもので、一昼間の制限時間内に歌んだ句数を競う俳諧興行をいう。西鶴は貞享元年(六四)大坂の住吉神社で二万三千五百句の記録を作った。

▼**上島鬼貫** 寛文元年(六六)〜元禄三年(七三)。伊丹の酒造家に生まれ、貞門の重頼に入門、のち談林に帰したがあきらまず、「まことの外に俳諧なし」という境地に達し『御言』を著した。

▼**松尾芭蕉** 正保元年(二四)〜元禄七年(六六)。名を宗房。俳諧という号もある。処女作「貝おほひ」を携えて江戸に下り、門人杉風の世話で深川に芭蕉庵を営んだ。「莊子」の思想に傾倒し、一時は禅宗に強くひかれたという。

▼**さび・しをり・ほそみ・軽み** それぞれ俳諧美についての概念であるが、必ずしも明確に定義されたものではない。ただ去来は、「さび」は句の色、「しをり」は句の姿、「ほそみ」は句意についての美的概念と説明している(去来抄)。「軽み」は主観過剰や技巧過多になつたりせず、句がさりとしていすることをいう。

▼**蕉風七部集** 芭蕉一代の俳諧撰集のうち、主要なもの七部を、のちの人が選定刊行したもの。「冬の日」「春の日」「鷹野」「ひさこ」「猿蓑」「辰俵」「続猿蓑」。「冬の日」は蕉風の基礎、『猿蓑』は蕉風円熟の頂点を示す。

▼**猿蓑** 元禄四年(六九)刊。円熟期の蕉風を代表する俳諧撰集で、俳諧の古今集とも評された。巻頭に芭蕉の句「初しづくれ銀も小蓑をはしげなり」が置かれ、書名の由来となつた。



あら何ともなききのふは過てふくと汁 (江戸三吟) (注) ふくと汁(河豚のみそ汁)  
 夜(こ)織(こ)二虫(こ)は月下(こ)の栗(こ)を穿(こ)ッ (虚栗) 句意は、昨日ふくとを食ってあ  
 初(こ)しぐれ(こ)狼(こ)も小(こ)糞(こ)をほ(こ)しげ(こ)なり (狼糞) たりはしないかと心配したが、  
 む(こ)めが、に(こ)のつと(こ)日(こ)の出(こ)る(こ)山(こ)路(こ)かな (炭俵) 何ともない、の意。  
 旅(こ)に病(こ)んで(こ)夢(こ)は(こ)相(こ)野(こ)を(こ)かけ(こ)廻(こ)る (笈日記) むめが、に「梅が香に。

● **漂泊と紀行文** 芭蕉は俳諧のあり方を模索するため、旅に出た。貞享元年(一六四)伊賀上野に帰省した旅は、初めての紀行文『野晒紀行』(甲子吟行)を生み出し、その旅の途中、名古屋でできた『冬の日』は、風狂精神(風雅に徹)のあふれた俳諧集として、蕉風展開の基礎をつくった。以後、『鹿島紀行』『笈の小文』『更科紀行』の旅などを重ねたが、最も重要な旅は、門人の曾良とともに元禄二年(一六六)に奥羽・北陸地方を巡った旅であり、その紀行文『奥の細道』は俳文中の傑作として名高い。この後、江戸に帰った芭蕉は、元禄七年(一六六)に帰省をかねて上方に再び旅し、大坂滞在中に五十一歳で病死した。

● **表現・文体** 西行・宗祇や杜甫など和漢の旅の詩人の系譜につながるような芭蕉は、彼らの作を文章の中に組みこみ、独自の詠嘆的な文章を作りあげた。したがって紀行文といっても、旅の忠実な記録ではなく、『奥の細道』においても大幅な虚構のあることが指摘されている。

『奥の細道』冒頭

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老いをむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もい

〔口語訳〕

月日は永遠の旅人であり、旧年が去り新年が来るというのも旅人のようなものだ。舟の上で一生を送る船頭や、馬をひいて老いていく馬方は、毎日が旅であり旅の中に住んでいるようなものだ。昔の人にも旅中に死んだ人は多い。私もいつのころからか、一片のちぎれ雲

づれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやます。

が風に誘われて流されるのを見ては旅心を誘われ、さすらいの生涯をしたいの思ひをおさえることができなくなった。

● **蕉門の俳人** 芭蕉の門下を蕉門といひ、芭蕉没後、それぞれの資質に応じた活動をした。向井去来は『去来抄』を、服部士芳は『三冊子』を著して、不易流行論など芭蕉の俳論を伝えた。また、森川訥六は『風俗文選』という蕉風の俳文集を編集した。蕉門の最古参檀本其角は潤達洒脱な句風を好み、都会的な洗練された江戸座の俳諧の祖となった。これに対し、各務支考は平俗な句風で美濃派と呼ばれ、地方に俳諧を広めていった。

切れたる夢は誠か蜜の跡 其角 (注) 切れたる……前書に、  
 あき風やしら木の弓に弦はらん 去来 「十六日おそろしき夢を見て」  
 歌書よりも軍書にかなし芳野山 支考 とある。

天明の俳諧

芭蕉没後の俳諧は、大衆化と同時に卑俗化の道を歩み、文学性を失っていった。天明年間(一八一〜一八二)ごろになって、ようやくこの傾向に歯止めをかけようとする、いわゆる俳諧中興の動きが各地で活発になっていった。その中心にいたのが、京都の与謝蕪村・炭太祇、江戸の大島蓼太、尾張の加藤晁台、伊勢の三浦栲良などである。また、尾張の横井也右は、俳文表現の極致とも評される『鞆衣』を著した。

● **蕪村** 大坂の郊外に生まれ、若くして江戸に出て俳諧と画を学んだ。中年以後は京都に住み、画家として生活する一方、俳諧にも力をいれ、夜半亭とも称して苦分太替・高井几童などの門人も育てた。漢詩や文人画理論の影響を受けて離俗論をとらえ、浪漫的な古典趣味の作や、清新な感覚表現を

芭蕉の紀行文

● **野晒紀行** 貞享元年(一六四)二年、江戸から伊賀など畿内を巡って再び江戸に帰るまで。  
 ● **鹿島紀行** 貞享四年(一六五)、鹿島へ月見に出かけた折の短い紀行文。  
 ● **笈の小文** 元禄元年(一六六)、江戸をたち、伊賀から吉野・須磨・明石といった歌枕を巡り、入京するまでの紀行文。  
 ● **更科紀行** 元禄元年(一六六)、『笈の小文』の旅の帰路、木曾路を通り、越前・山や普光寺に立ち寄った折の紀行文。  
 ● **奥の細道** 元禄二年(一六六)、曾良とともに江戸を出て、奥羽・北陸を巡り、大坂に至る。



奥の細道の旅の出立(蕪村筆 奥の細道画卷)

● **連句と発句** 発句(五七五)・脇句(七七)・第三(五七五)……と続けていく長編の俳諧を連句というが、この連句のうち発句だけを独立して詠む風習は室町末期に確立され、明治に正岡子規がこの発句を「俳句」と称するようになった。上段に掲げたいくつかの作品は、いずれも発句である。

● **向井去来** 慶安四年(一六五)〜宝永元年(一七〇)。芭蕉に『俳諧奉行』と称され信頼が厚かった。『狼糞』の撰者。俳論『去来抄』がある。去来の別荘の落柿舎で芭蕉は『笈日記』を書いた。  
 ● **服部士芳** 明暦三年(一六五)〜享保十五年(一七〇)。著書『三冊子』は、白冊子・赤冊子・黒冊子から成り、『去来抄』とともに蕉風俳諧の研究に必読の俳論書である。  
 ● **不易流行論** 不易は変わらないもの、流行は変化していくもの意。俳諧はその両面に立脚するという俳論。

● **横井也右** 元禄十五年(一七〇)〜天明三年(一七三)。尾張藩の重臣。「鞆衣」は天明七年(一七三)〜文政六年(一八二)刊。

● **与謝蕪村** 享保五年(一七三〇)〜天明三年(一七三)。摂津の生まれ。江戸の早野巴人に入門し俳諧を学んだ。芭蕉を慕い奥州を旅行したこともある。画家としても著名で京都に門戸を開いた。漢詩に素材を得た作も多く、友人の上田秋成は蕪村を「仮名書きの詩人」と評した。



# 川柳・狂歌

## 川柳

俳諧と並行して、庶民の間には、より遊戯的な要素をもつ雑俳（雑体の俳諧）が流行した。雑俳にはさまざまな形式のものがあったが、最も喜ばれたのが前句付という形式であった。江戸の栢井川柳は、その前句付の点者（評点を加える人）として宝暦年間にデビューし、優秀な前句付の作を『川柳評万句合』と題して編集・出版し、好評を博した。そして、この万句合から、前句がなくても意味のよくわかる面白い付句のみを、呉陵軒可有という本屋が選んで出版したのが『柳多留』である。これ以後、前句付から独立した付句のことを、点者の名前川柳にちなんで、川柳と呼ぶようになった。

川柳は、俳諧の発句のような季語や切れ字も必要なく、より自由な平俗な形式として流行し、江戸市民の風俗や世相や人情の機微を巧みに詠みこむ短詩となった。しかし、寛政の改革以後、しだいに観察や皮肉の鋭さがなくなり、マンネリ化していった。『柳多留』は初編を明和二年（一七六五）に出版して以後続刊され、天保年間、五代目の川柳によって百六十七編が出されて廃刊となった。

江戸者の生れそこない金をため  
 遣へば立てたば歩めの親心  
 南無女房乳を香ませに化けて来い  
 役人の子はにきにきをよく覚へ  
 居候いつもせんべいかしは餅  
 雨宿りちよつくと出ては濡れてみる

（送）江戸者の……！江戸つ子は  
 背馳しの金をもたない金を  
 ためこんだりはしないものだ、  
 という運急をふまえた句。

得意とした。また、「春風馬堤曲」や「北寿老仙をいたむ」は、みずみずしい抒情にあふれる一種の長編自由詩で、近代の詩人たちの評価が高い。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉 蕪村  
 几かさのふの空のありどころ 蕪村  
 ぼたん切て気のおとろひしゆふ哉 蕪村  
 行く程に都の塔や秋の空 太祇  
 五月雨やある夜ひそかに松の月 蓼太  
 はつしもや飯の湯あまき朝日和 櫻良



蕪村 高弟の月溪筆。

## 幕末の俳諧

中興の諸家が相次いで没した寛政年間（一七九九～一八〇六）以降、俳諧の祖としての芭蕉は権威化され、俳諧人口はいよいよ増大していったが、同時に低俗化も進行した。化政期（一八〇四～一八一八）ごろから、懸賞を伴った遊戯的な月並俳諧が流行しはじめ、千編一律の月並調の句が量産され、明治になって正岡子規に「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず」と非難されるような状態におちいつていった。そうした中で異彩を放ったのが小林一茶である。

## 小林一茶

家庭的に恵まれなかった一茶は、若くして江戸に出、奉公の傍ら俳諧を学び、西国を行脚ののち、晩年故郷の信州に定住した。一茶の作品には、生活の苦勞や、生涯失うことのなかった農民性をよりどころにした率直で個性的な句が多く、句集『おらが春』は名高い。

なかくに人と生まれて秋の暮  
 是がまあつひの柳か雪五尺  
 瘦せ膝負けるな一茶是にあり

▶月並俳諧 社寺への奉納を名目に、毎月締切り日をきめて、一般から投句料をとって句を募集し、締切り後すぐに点をつけ、高 POINT 者には景品を出し、入選句は印刷して投句者に返送するというもの。庶民のささやかな名譽心と解作心をくすぐる知的な遊戯となった。

▶小林一茶 宝暦十三年（一七六三）～文政十年（一八二八）。あたかも日記を書くかのように日々の俳句を記し、『七番日記』をはじめとし『享和句帖』『文化句帖』『八番日記』などがある。また帰郷して父の死をみとつた時の記録『父の終焉日記』は、家族への愛憎がなまなましく記されている。『おらが春』の書名は、巻頭の句「目出度さもちう位也おらが春」による。



一茶 門人の松村春浦筆。



六歌仙小野小町(葛飾北斎筆)「その乃乃の(町)小丁(町)」の文字が隠された文字絵になっている。

▶前句付 はじめは俳諧の選句での付合のけいことして、長句（五七五）に短句（七七）、あるいは短句に長句を付けるものであったが、のちに連句の一部であるという考えから離れて、どうにでも付けられる抽象的な短句を出して、人の意表をつく長句をいかに付けるかという遊戯になったもの。たとえば、  
 （前句） 案じてぞ居るく  
 （付句） 抱いて寝る下女が小判の持ちはじめ

▶栢井川柳 享保三年（一七二〇）～寛政二年（一七九〇）。江戸の人で浅草の名主。俳諧は大島彌太に学んだといわれ、四十歳で万句合の点者となった。『柳多留』は二十四編までが初代川柳の点。辞世の句は、「用やあとで芽をふけ川柳」。

なお、川柳の作者はほとんど名前がわからないが、上は大名から下は一般庶民まで、広範な作者層がいたといわれる。





# 狂歌

狂歌とは、狂体の和歌の意であり、和歌の形式に滑稽な内容を詠みこんだものである。『万葉集』に戯笑歌があり、『古今集』

に俳諧歌があるように、和歌の歴史とともにこの種の歌は存在し続けてきたが、近世になって一つの独立したジャンルとして流行した。

●**上方狂歌** 貞門の俳諧師などによって、俳諧とともに狂歌も詠まれていたが、生白堂行風が古今の狂歌を集めた『古今夷曲集』(寛文六年)を出版して以後、狂歌もまた流行のきざしを見せた。そして浪花ぶりを提唱する大坂の永田貞柳の登場によって、上方狂歌は全盛期を迎え、専門の狂歌師も生まれた。しかし、総じて詠風は和歌の通俗的なものじりにとどまるものであった。

●**天明狂歌** 近世後期になると江戸の地に新しい狂歌の流行がおこった。幕臣の**唐衣橋洲**や**四方赤良**(蜀山人)や**朱楽菅江**などを中心に、鋭い機知と軽妙洒脱な作風を特徴とした。天明三年(一八三三)に『万載狂歌集』が出版されて全盛を迎え、天明狂歌と呼ばれた。

ついで文化・文政期には、赤良の門人の**鹿部真顔**や**宿屋飯盛**などが活躍したが、すでに天明期の狂歌の清新はつらつとした趣は失われていた。



四方赤良(吾妻曲歌文庫)

風鈴の音はりんきの告口かわが軒のつまに秋の通ふを  
世の中にたえて女のなかりせばをとこの心のどけからまし  
歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは

唐衣橋洲  
四方赤良  
宿屋飯盛

- ▶ **生白堂行風** 生没年未詳。大坂・高津に住んだ真宗の御僧。俳諧を貞門の松江重頼に学んだ。
- ▶ **永田貞柳** 承応三年(一六二四)〜享保十九年(一七四八)。大坂御堂前の子屋風屋の主人であった。宝蔵坊信海に狂歌を学び、門弟三千人と称した。弟の貞柳は、近松門左衛門と対抗した浄瑠璃作者結城春である。
- ▶ **唐衣橋洲** 寛文三年(一七六三)〜享和二年(一八一二)。本名を小島謙之助という田安家の家臣。作風の逸いから、のち四方赤良と対立した。
- ▶ **四方赤良** 寛延二年(一七五九)〜文政六年(一八二五)。お徳士という下級藩臣、大田直次郎といい、南歌と号し、文人として知られた。和漢雑俗の文学に通じた多能多才な人で、天明文学のスターであった。蜀山人は中年以後の狂名である。

## 参考 発明された人生観——天明狂歌

天明狂歌はその發祥に於て青春の運動であり、老朽の徒はかへつてこれに参加しないといふ事情があつた。この運動が生活上に發見した意味はただちに文學上の価値につながる。その価値のつかまへられたところは、前代の伝統の外に出て、また後世の車流の中に無い。発明はかならずしも様式にはなくて、じつに人生観にあつた。すなはち、狂歌の歴史では、天明狂歌はその人生観に於て古今に孤立してゐることになる。(石川淳「狂歌百鬼夜狂」)

# 芸能

## 浄瑠璃

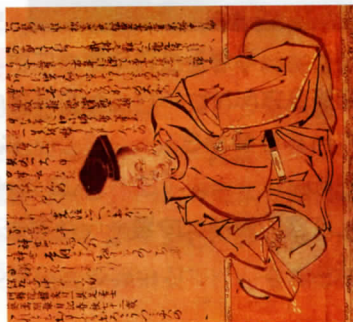
室町後期に、牛若丸(源義経)と浄瑠璃姫との恋を扱う『浄瑠璃物語』が盲目の法師などによって、扇拍子や琵琶の伴奏で語られていたが、その語り口が後に一般化して、**浄瑠璃**と呼ばれるようになった。

●**古浄瑠璃** 語り物としての浄瑠璃に、琉球渡来の三味線の伴奏と人形操りが結合して、近世初期に**人形浄瑠璃**が成立した。ふつう、義太夫節以前のものを古浄瑠璃とよび、以後のものを新浄瑠璃とよぶ。古浄瑠璃にはさまざまな流派があつたが、土地柄により、江戸では勇壮な金平節が流行し、京都では優美な宇治加賀掾の嘉太夫節がもてはやされた。

●**義太夫節** 宇治加賀掾の門人であつた**竹本義太夫**は、貞享元年(一六六四)、大坂道頓堀に竹本座を開き、作者に**近松門左衛門**を迎えて人気を博し、義太夫節の浄瑠璃が浄瑠璃界を制覇することになった。

竹本座の座付作者となつた近松は、貞享三年(一六八六)に『**出世景清**』を書き、以後、浄瑠璃の演劇化をおし進める傑作を数多く生んだ。

▶**時代物** 近松の作品は、時代物と世話物の二つに分けることができる。時代物は、歴史上の事件・伝説に取材した作品で、



近松門左衛門(重徳筆)



人形浄瑠璃(義経千本桜)

- ▶ **浄瑠璃物語** 成立年未詳。「十二段草子」ともいう。三河の国矢野の長者の娘浄瑠璃姫と牛若丸との恋を描いたもの。
- ▶ **金平節** 坂田金時の息子金平を主人公とするもので、勇壮な武勇譚を内容とする。樫井和泉太夫を中心に流行した。
- ▶ **近松門左衛門** 承応二年(一六二三)〜享保九年(一七三九)。本名は杉森信盛。東林子などの号がある。武士の出であるが、父の代に浪人して京都に住んだ。生涯に時代物浄瑠璃を七十余編、世話物を二十四編書き、ほかに歌舞伎脚本も書いた。
- ▶ **出世景清** 貞享三年(一六八六)初演。平家の残党景清は、仇を報いようと源頼朝をねらうが、捕えられる。観世世音菩薩の身代わりで助かり、頼朝にも許されるが、景清は頼朝を見ないよう両眼をえぐるという話。竹本義太夫の前夜を祝して、「出世」の二字を冠したという。